

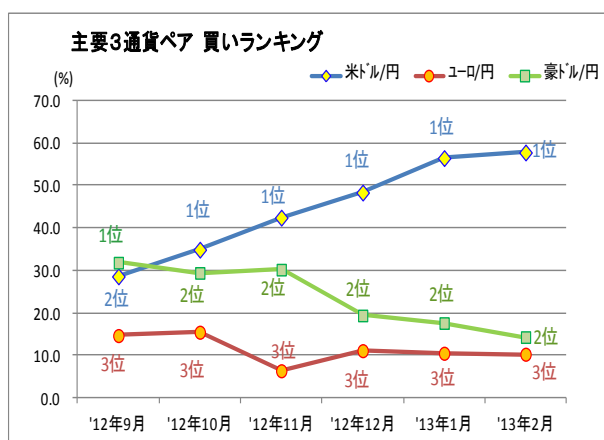
外為短観レビュー FX投資家は米ドル/円の買いに傾斜

はじめに

昨年10月のソフトバンクによる米携帯電話会社の買収をきっかけに下落を開始した「円相場」は、民主党から自民党への政権交代を経て下落基調が鮮明となった。さらに、第96代首相に就任した安倍晋三・自民党総裁が提唱する「大胆な金融緩和」への期待からこの流れに拍車がかかり、円は主要通貨に対してほぼ全面安の商状となっている。この間、米ドル/円は78円前後から96円台へ実に18円以上の大幅な上昇を示現した。昨年1年間かけて作った値幅が10.77円(76.02-86.79円)という小動きにとどまった事もあって、為替市場で存在感が薄れかけていた米ドル/円に再びスポットライトが当たる事になった格好である。こうした中、本邦FX投資家の関心も米ドル/円に回帰するとともに米ドル買い・円売りの取引を活発化させている模様だ。

「買い」で注目のランキング

外為どっとコムが月次で行っているアンケート調査「外為短観」では、同社が取り扱う12通貨ペアの中で「買い」で注目している通貨ペアと「売り」で注目しているペアの双方について質問し、それぞれのランキングを公表しているが、これはそれぞれ、「買いたいと思う通貨ペア」および「売りたいと思う通貨ペア」のランキングと読み替えても差し支えないだろう。その「買い」で注目のランキングと回答割合の推移からも、本邦FX投資家の注目が米ドル/円に集まっている様子が覗える。昨年9月以降、「買い」で人気のランキングにおける上位3通貨ペア(米ドル/円、ユーロ/円、豪ドル/円)の顔ぶれに変化はないが、その順位や回答割合には興味深い変化が見られた。下表のとおり、米ドル/円は昨年9月の調査では豪ドル/円に1位の座を譲ったが、10月調査ではトップの座を奪還。以後、円安基調が鮮明になるにつれて、月を追う毎に回答割合が上昇している。なお、最新の2月調査では過去最大となる57.8%の支持を集めて2位の豪ドル/円に43.5%ポイントもの大差を付けており、後続に影をも踏ませぬ圧勝の状態となっている。



米ドル/円予想DI

「外為短観」の米ドル/円予想DIは、昨年9月の時点では▲3.2%ポイントと、ドル弱気・円強気予

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

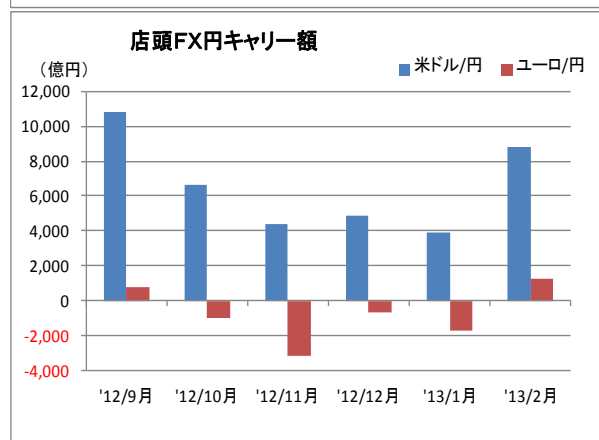
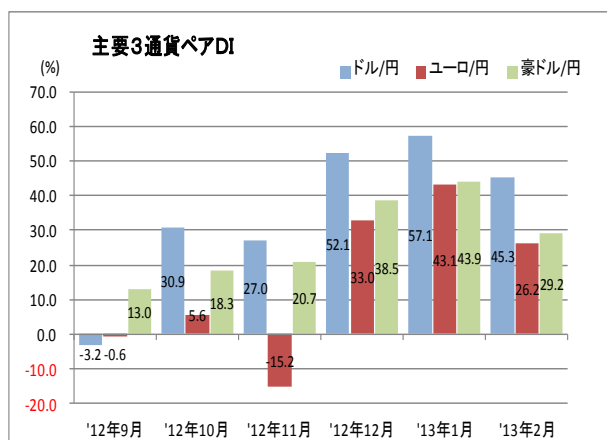
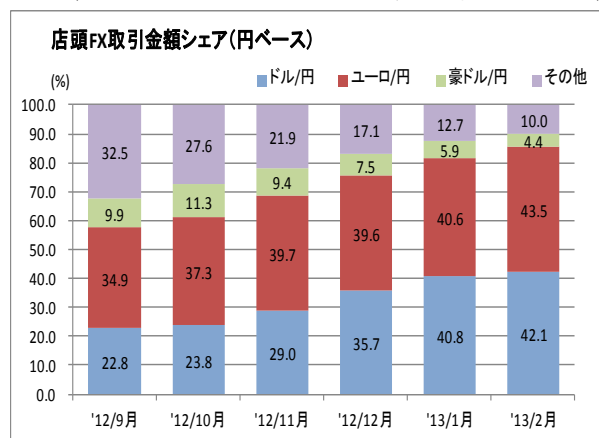
Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

想がやや優勢となっていたが、米ドル/円が上昇を始めた10月には大幅なプラス(ドル強気・円弱気)に転じた。その後、昨年12月の第43回調査と今年1月の第44回調査は2ヶ月連続で調査開始以来最大のプラス幅を記録し、+57.1%ポイントまで上昇した。そのプラス幅はユーロ/円や豪ドル/円を5ヵ月連続で上回っている。最新調査である2月の第45回調査では、プラス幅こそやや縮小したものの、高水準を維持しているとともにユーロ/円や豪ドル/円とのプラス幅の格差はむしろ広がっている。これは、本邦FX投資家がユーロ/円や豪ドル/円などのクロス円よりも米ドル/円相場に強気である事を示している。

なお、過去最大のプラス幅となった1月の予想DIを算出するにあたって「今後1ヵ月間の相場見通しは」と質問した際の回答割合は、米ドル高・円安と答えた向きが70.7%にのぼり、円高・米ドル安と答えた割合は13.8%に過ぎなかった(概ね横ばいが15.5%)。

店頭FX月次速報値

店頭FX市場の取引に係る月次報告からも、FX投資家が「米ドル買い・円売り」に傾斜している様子が窺える。一般社団法人・金融先物取引業協会 (<http://www.ffaj.or.jp/>) が店頭FX各社からの報告に基づいて集計・公表している「店頭FX月次速報値」によると、昨年9月の総取引金額に占める米ドル/円の割合は22.8%(円ベース)であり、円相場下落が始まった10月でも23.8%に過ぎなかったが今年2月には42.1%まで拡大した。これは、ユーロ/円の43.5%には及ばなかったが、



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

両者の円キャリー額(円売建玉から円買建玉を差し引いた各月末時点におけるネットの円売建額)を比較すると、米ドル/円の残高のほうが圧倒的に多く、ユーロ/円はユーロ売り・円買い超を示すマイナスの月が目立っている。つまり、ユーロ/円の総取引に占めるユーロ買い・円売りの割合は、ドル/円でドル買い・円売りに比べ小規模であると言えるだろう。

まとめ

昨年後半から続く「アベノミクス」相場において、FX投資家は取引を活発化させたが(店頭FX市場の総取引金額は2月に366兆円まで拡大して過去最高を記録している)、円安基調が鮮明となる中で、ドル買いを最も積極的に手掛けているようだ。もちろん、米ドル/円が「円相場」のベンチマーク(指標銘柄)的存在であるという事もその大きな理由であろう。ただ、投資対象先として考えた場合、ユーロや豪ドルに対する信頼感低下と米ドルに対する信頼感の上昇というコントラストが米ドル/円の買いに人気が集まる大きな要因となっているのではないだろうか。

ユーロについては、南欧諸国の債務問題に一服感が見られるとは言え、2月25日の「イタリア・ショック」のように、いつ何時、不意打ちを食らうかわからないという不安が付きまとう。豪ドルについても、足元では利下げ観測は後退しているが、度

重なる利下げの結果、政策金利は過去最低に並ぶ3.00%まで低下しており、かつてのようにスワップポイントの面で「高金利」を享受しにくくなっている。対して米ドルは、足元で米国の景気回復が勢いを増しており、連邦準備制度理事会(FRB)が量的緩和の解除を模索し始めたとの思惑から上昇基調にある。さらには「シェール革命」により米国が資源輸出国に転じるとの観測もあり、長期的な米ドルの上昇を予測する声もある。こうした理由から多くのFX投資家は、円の減価を今後の基本見通しとして、最も増価が見込める通貨に現時点では米ドルを想定していると考えられる。(了)

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com